

出エジプト記3章11節「私は何者？」

1A ずたずたにされた自尊心

1B 四十歳

1C ファラオの家

2C エジプトの学問

3C ことばと行い

4C 同胞の救済者

2B 八十歳

1C ミディアン人の羊飼い

2C 無名

3C 不信

4C 口下手

5C 挫折

2A 無能な者を用いる全能者

1B 共におられる方

2B 「わたしはある」という方

3B 神の杖

4B 口に置くことば

6B 御怒り

3A 神の召し

1B へりくだり(神が主人)

2B 信頼

3B 従順

4B 自分にあきらめるまで、待たれる神

本文

出エジプト記3章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回、2章まで来ましたが、午後礼拝で2-3章を一節ずつ、見ていきます。今朝は、3章11節に注目します。「**モーセは神に言った。「私は、いったい何者なのでしょう。ファラオのもとに行き、イスラエルの子らをエジプトから導き出さなければならないとは。」**」

時は、モーセがエジプトから出て行き、ミディアン人イテロの家で羊飼いをして、四十年後です。燃える柴から、アブラハム、イサク、ヤコブの神がモーセに語りかけました。それで、エジプトの手から彼らを救い出して、父祖に約束した、カナンの地にイスラエルの子らを導き上げるように、主は

命じられます。その呼びかけに対する、モーセの反応がこれなのです。「**いったい何者なのでしょう**」ということです。

モーセは、以前、エジプトにいた時には、自分が何者なのかを分かっていた。エジプトの娘の養子であり、自分には、することがあると分かっていた。虐げられているイスラエルの人々を救い出すのが使命なのだと思っていました。ところが、ことごとく失敗して、エジプトの王はモーセの命を狙ったので、そこから出て行って、シナイの荒野にある、ミディアン人の家で仕え、そこでお嫁さんをもらい、羊飼いをしていました。エジプトを出たのが四十歳の時でしたが、今は八十歳です。だから、エジプトに戻って、イスラエル人を救い出して、それから父祖に約束した地に導き上りなさいと言われたって、俺は何様？って思ったのです。彼の自尊心は、ずたずたにされていました。

聖書には、私が何者かを知るには、神の召しが必要であることを教えています。神が、自分を救いに召した。また、神に仕えるように召しておられ、それで、ある働き、ある奉仕の務めに召され、それによって、自分が今の自分なのだと知ります。

そこから、敷衍して「天職」という言葉があります。もしかしたら学校で、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という、マックス・ウェーバーによる著書について、聞いたことがあるかもしれません。それは、利益中心の動機ではなく、「ここに置かれているのは神の召しによる」という確信によって動かないといけないという内容です。結果として利潤が生まれますが、それが目的ではありません。利潤は、さらに社会に貢献するための再投資とみなされます。

しかし、世においては、「自分にやりがいのある職業」という言葉があるように、自己実現であるとか、自己開発であるとか、自分を高めることを基準としています。しかし、召しとは、「神にある自分」を知ることです。神から離れた自分を求めるのは、かえって邪魔になります。

1A ずたずたにされた自尊心

1B 四十歳

それを経験した第一人者が、モーセです。彼がエジプトから出た時は、四十歳です。四十歳は英語で Prime of Life、「人生の全盛期」です。自分のキャリアの頂点であり、自己実現の余裕が出る時期とも言えます。若い時は下積みをしなければいけません。また自分の適性もまだ見えてきません。40 歳ぐらいになって、ようやくこれまでの積み上げたもの、また、適性も見えてきます。しかし、60 歳にでもなれば、今度は自分の体に限界が出てきます。以下に人生を終わらせるかが、大きな関心事となりますね。ですから、モーセは、まさに絶頂期だと言えます。

1C ファラオの家

彼は、エジプトにおいて、ファラオの娘の養子として育ちました。ステパノがサンヘドリンで、モー

セについて語った部分を取り上げますと、「使 7:21 ついに捨てられたのをファラオの娘が拾い上げ、自分の子として育てました。」とあります。

2C エジプトの学問

そして、ステパノによると、「7:22 モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。」とあります。古代において、エジプトは今のアメリカです。何かを学びたいと思ったら、米国に留学に行き、研究しに行く人々が多いように、エジプトは当時の学問世界における最高峰でした。そこで、あらゆる学問を教え込まれたのです。

3C ことばと行い

そして教養があるだけでなく、雄弁でした。エジプト社会では雄弁であることは、必須の美德とされていました。そして、ふるまい方、パフォーマンスも優れています。

4C 同胞の救済者

言うことがないですね。その上で、彼は高尚な使命感を抱いていたのです。それが、「同胞を救い出す」ことです。これほど、仲間を救い出すのに有利な状況はないのではないのでしょうか？それで、イスラエルの人がエジプト人に虐げられているのを見て、そのエジプト人を打ち殺しました。ところが、です。「7:25 モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。」イスラエル人が、むしろモーセを、救いを与える人だとみなしていなかったのです。

これは、相当、驚いたと思います。そして、打ちのめされたと思います。これ以上、エジプトからの救いのために用意されていないのでは？と思うぐらい、用意されています。王家の息子、再考の学問、スピーチ力にも行動力にも優れ、それでもって高尚な使命感を抱いている。ところが、イスラエル人を救えないどころか、彼らから理解されていませんでした。

私も以前、打ちのめされました。カルバリーチャペルと言え、米国の教会の歴史にも残るリバイバルを経験しています。チャック・スミスの牧会する教会にいました。そして、直接、教わりました。彼の教える原則さえ守っていれば、日本に戻り、自分の始めた家庭集会は、たちまち人々が増えて、教会が建てられると思ったのです。ところが、教会にならないどころか、その家での集まりには、私たち以外に、たった 1 人しか残らなかったのです。しかも、その 1 人も教会には行きたくなかった人なのです。なので、ゼロです。

2B 八十歳

1C ミディアン人の羊飼い

そしてモーセは、ミディアン人の家で羊飼いをしていました。何でもなしの人になりました。そして 80

歳になっています。もう将来は見えない年齢になっています。以前、ツイッター(今の X)で話題になった貼り紙がありました。「18 歳と 81 歳の違い」です。乳がんで闘病中の 50 歳ぐらいの女性に、母からメールで送られてきた、自虐ブラック・ユーモアです。

恋に溺れるのが 18 才、風呂で溺れるのが 81 才。

道路を爆走するのが 18 才、逆走するのが 81 才。

心がもろいのが 18 才、骨がもろいのが 81 才。

.....

自分探しをしている 18 才、皆が自分を探している 81 才。¹

伝道者の書 12 章には、若者への警告をソロモンが書いていて、それから、自分が衰えていく様子を、いろいろな比喻で言い表しています。もう先が見えないと、人間的には言えます。

2C 無名

最も、人生において勢いのあった時に大失敗をし、それから誰にも知られずに生きていたのですから、「**私はいったい何者なのでしょう(11 節)**」と言っても、ごく自然ですね。

3C 不信

そして、主にモーセは、こうも尋ねています。「3:13 **今、私がイスラエルの子らのところに行き、『あなたがたの父祖の神が、あなたがたのもとに私を遣わされた』**と言えば、彼らは『その名は何か』と私に聞くでしょう。私は彼らに何と答えればよいのでしょうか。」自分が語るにも、「なんの神さまなの？」と、思われてしまいます。その神なに？と思われそうです。パウロが、アテネで福音を語ったら、あざ笑われました。ギリシアも同じように多神教で、神というのは目に見えるもので、目に見えない神、しかも復活なんていったら、馬鹿げていると思われていたのです。ですから、モーセも、信憑性に欠けると思われておしまいですよ？と言っているわけです。

また、4 章 1 節では、「**私の声には耳を傾けないでしょう**」と言っています。また、「**主はあなたに現れなかった**」とも言います。そんな神がいても、あなたがそれを言ったらおしまいね、という意味です。あなたが勝手に言っているだけ、自称、預言者でしょ？ということです。

4C 口下手

そしてモーセは、「4:10 **ああ、わが主よ、私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。**」とまで、言っています。これは、偽りの謙遜です。ことばと行いにおいて、すぐれていました。しかし、気持ちは分かります。もう 40 年経っているのです。人前で語らず、ただ黙々と羊を飼っていたのですから、口下手

¹ <https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/omoshiro/202305/0016371870.shtml>

になってもおかしくありません。

5C 挫折

そして、モーセにとって致命的だったのは、自分ができないいろいろな理由を語りましたが、そもそも、行く気がなかったのです。「4:13 **ああ、わが主よ、どうかほかの人を遣わしてください。**」彼は、完全に挫折していました。人生の全盛期に、最も良い条件が整っていたのに、たった一人のイスラエル人も救い出せなかったのです。トラウマになっているといつてよいでしょう。

2A 無能な者を用いる全能者

しかし、それが神の召しを受け取るのに、実は最適なのです。それは、これまでは「自分はもうだめだ」でありましたが、だから、自分が舞台から降りて、神に譲ることができる準備ができました。

1B 共におられる方

モーセの、「**私は、いったい何者なのでしょう**」に対して、神は、こう答えておられます。「3:12 **わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。**」誰が共にいるか、で、すべてが変わりますね。自分がするのではなく、神がすべてを行ってくださるのです。ここでは、自分への自信は問題ではなく、神ご自身への信頼が問われます。主イエスは、「マル 10:27 **それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。**」と言われました。

2B 「わたしはある」という方

そして、「あなたの名について、問われたら、なんと答えればよいでしょうか？」というモーセの問いに対しては、「3:14 **わたしは、『わたしはある』という者である。**」と言われています。これは、エジプトの神々と呼ばれているものに対して、圧倒的に、比べられない優位な方を意味しています。

午後礼拝で詳しくお話しますが、偶像礼拝というのは、何か力あるもの、自分の欲することなど、その表しているものを象徴するのが、そのまま神です。太陽は、すべてに恩恵を与えますが、それが神となります。かえるは、ナイル川の豊かさを示しますが、そのまま神となります。しかし、「わたしはある」というのは、その恩恵をもたらす方です。恩恵自体ではなく、恩恵の源です。いわば、「神々の神」です。圧倒的に違います。

3B 神の杖

そして、「**主はあなたに現れなかった**」という言葉に対して、主は、彼の手になっている杖を投げなさい、と命じられます。すると、なんと蛇になりました。そして、蛇の尾をつかみなさいと言われます。モーセが従ったら、杖に戻りました。この、羊飼いの杖が、後に「神の杖」となります。この神の杖を、紅海の前で上げた時に、水が分かれたのです！

これなら、モーセにもできますね？というか、あまりにも小さいことなので、それをできるとか、できないとか問う必要さえありません。分かりすくいうと、「あなたは、今、できていることがありますよ」と言って、「いいえ、何もありません」と答えます。「でも、息、してますね？」もし神が、その息を使って、富士山を動かすほどの力を与えたらどうでしょうか？「何もできません」と言っても、今、座っていますね。座ることによって、地面が割れるほどの力を神が与えたとします。することは、ただ、「今、座りなさい」という命令に、従うだけです。できるとか、できないとかいうのではなく、すでに、あまりにもできていること、すでに行っていることを、神は用いられて、ご自身のことをするのです。

4B 口に置くことば

そして、「私は口が重く、舌が重いのです」と言ったことに対しては、「4:12 今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える。」と言われました。自分が語るのではありません、神が語られるのです。

聖書を教えたり、説教をする、福音を語る者に必要なのは、いかに語るか？ではなく、いかに聞くか？であります。主から聞いたことしか、語れません。語るよりも、聞き上手になるのです。

6B 御怒り

そして、「どうかほかの人を遣わしてください」と言ったことに対しては、主は怒りました。「4:14 すると、【主】の怒りがモーセに向かって燃え上がり、こう言われた。「あなたの兄、レビ人アロンがいるのではないか。わたしは彼が雄弁であることをよく知っている。見よ、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぶだろう。」

主が、もっとも嫌がるのは不従順です。自由意志を尊ばれる神は、もしその自由意志を使って、ご自身がなさることを拒めば、何もすることができないからです。モーセが、進んでその呼びかけに応えなければ、ご自身を民に示すことができません。神は、ロボットのように強制しないからです。

3A 神の召し

これで、いかがでしょうか？「自分にできるか、できないか？」ではなく、「神ができる」いや、「神がする」と言われていることに、聞き従うことなのだとということなのです。ですから、私たちが求められているのは、応答することです。召しに対する応答で必要なことは何か？

1B へりくだり(神が主人)

まず、へりくだることです。これまでは、自分ができるかどうか、という、自分が中心の考え方でした。自分にはできないと言っているのは、まだ、自分に可能性があると思っているからです。あるいは、自分を中心軸に考えているからです。人間にとって、もっとも嫌なのは、そのように、心の王座に、自分がいるのを他の人に譲ることです。これから、自分ではなく、徹底的に主に言われたこ

とに聞き従うのです。しもべになります。ですから、主を主とする、主人とするという、へりくだりが求められます。

2B 信頼

次に「信頼」です。神が、これこれのことができるし、また、するのだという信頼が問われています。漠然と、神を信じるという消極的なことではなく、具体的な事柄で、「ここにも神がおられる。神はすることができる。」と、積極的に信頼することです。長血を患う女が、「イエス様の着ている、すそにさえ触ったら、清められる」と信じて、群衆の中に入って、触りに行きました。

3B 従順

そして、三つ目に「従順」が求められます。従順とは？自分が幼い子で、お父さん、またお母さんから、「これしなさい」「これやっちゃだめ」と言われる時に、自分では何か分からないけれども、とにかく従うてありましたよね？それです。圧倒的な知識と知恵を持っておられる方を信頼しますが、その信頼において、自分には全く分からなくても、とにかく従うのです。だって、幼い子が父のしていることが分からないように、いやそれ以上に、私たちは神のされようとしていることが、分からないのですから。

こうやって、私たちは、自意識過剰になってはいけません。自意識過剰ではなく、神意識過剰になりましょう！自意識過剰から、神意識過剰になる時に必要なのが、この「へりくだり」「信頼」「従順」であります。

4B 自分にあきらめるまで、待たれる神

そして、主は、私たちが自分に死に神に任せる時まで、待つてくださる忍耐深い方です。それは、自分が自分を手放す時まで、自分で失敗するのをお許しになることです。ペテロが、「死んでも、あなたに従います」と言いましたが、無理やりやめさせませんでした。鶏が鳴くまで、三度、ご自身を知らないと言ったことを知っていても、そのままにされました。ペテロは激しく泣きました。自分の肉がどれだけ弱いかを知って、彼が肉に頼らず、御霊なる神に頼ることを覚えるためです。

主は、そこまで寛容な方です。私たちは、モーセのように、失敗をすると、それが心の深いところで恥となり、もう表に出たくないと願います。神の前で恥ずかしいと思います。しかし、主はその若い時の罪を、深い悔い改めの中にいる者たちには見逃してくださいます。やり直し、むしろ、それを自分自身に頼らず、神に心を尽くして拠り頼む、肥しとして用いてくださるのです。